

専修大学野球部監督

町田公二郎さん

(平4・商業)

まちだ こうじろう●1969年高知県生まれ。小学生で野球を始め、明徳義塾高校時代には選抜高等学校野球大会に出場。専修大学では野球部に所属し、2年次に首位打者およびベストナインを受賞するなど春季リーグ優勝に貢献。日米大学野球日本代表などにも選出される。1991年にドラフト1位で広島東洋カープ入団。2004年に阪神タイガースへ移籍。2006年シーズン限りで現役引退し、三菱重工広島硬式野球部（現在は活動休止）、福井工業大学で監督を歴任。2026年2月に専修大学野球部の監督に就任した。

「専修大学は私を大きく成長させてくれた場所です。2年生の時の東都1部春季リーグ戦での優勝は、私の人生の大きな分岐点になりました。そのチームの指導にあたれるのは本当にうれしいことですし、力も入ります。やるからには1部常連の強いチームをつくりたいです」

今年2月に野球部監督に就任した町田公二郎さんは、そのように意気込みを語った。そして、始動した新チームは既に結果を出している。東都2部春季リーグ

戦を10勝1敗で終え、就任1年目でチームを7季ぶりの優勝に導いたのだ。

1991年のドラフト会議では広島東洋カープから1位指名され、入団。2006年に現役引退するまでの15年間で数多くの記憶に残るプレーを見せてくれたが、その真骨頂は「代打」での活躍だ。残した記録の数々がそれを物語っている。

通算代打本塁打20本は歴代2位。そのうちの4本が満塁本塁打で、これは歴代1位タイの日本記録だ。同じく9年連続

代打本塁打という記録は、後にも先にも町田さん以外の誰一人なし得ていない金字塔。まさに「一振り」で多くのプロ野球ファンを魅了し続けてきた。

兄の影響で野球を始める 高校時代は甲子園に出場

町田さんが野球を始めたのは、小学生の時。2歳年上の兄にくっついて地元の野球チームに入ったのがきっかけだった。ちなみにその兄とは中学、高校、そして

「一振り」に賭けたプロ野球人生。 ついに母校の野球部監督に就任！

大学時代は首位打者、ベストナインのタイトルを獲得し、1部優勝にも貢献。

ドラフト1位でプロ野球に進んでからも持ち前の長打力でファンを魅了し、数々の記録を残した町田公二郎さん。

引退後はプロ、社会人などで指導者を経験し、今年2月について野球部の監督に就任となった。

大学時代の思い出や、野球選手として大切にしてきたこと、今後のチームづくりへの思いなどを伺った。

て大学でも同じチームでプレーしている。「まさに自分を導いてくれた存在であり、全てが自然の流れだったように思いますね」と振り返る。

「心の成長なくして技術の成長なし」をモットーに、野球と真摯に向き合い続ける町田さんだが、それを教わったのは野球を始めたばかりの小学生の頃だった。

「自分さえ良ければいい、そんな考えで準備すらろくにしようしない『お山の大将』だった私を見かねて、当時の指導者が投げかけてくれたのがその言葉でした。小学生ながらに『このままではいけない』と感じ、悔しくて自然と涙が出たことをよく覚えています。まさに自分の原点です」

町田さんが生まれ育った高知県では多くのプロ野球チームがキャンプを行っていたことから、仲間たちとキャンプ地に

足を運んだり、野球教室に参加することもあったという。そうやって触れたプロ野球の選手たちは憧れではあったものの、「プロは最高峰の世界です。自分を重ねる対象ではありませんでした」と話す。

地元の中学校を経て、兄を追うように明徳義塾高校に進学。今や野球の名門校として知られる同校が甲子園に出場するようになった頃であり、町田さんも3年生の春には選抜大会に出場している。惜しくも初戦敗退だったが、球児憧れの甲子園の土を踏んだ。

刺激にあふれた専修大学 1部優勝にも貢献

大学でも野球を続けたい、そう考えた町田さんが選んだのが専修大学だった。「高校は高知の山の中にあっただけ、東京のことなんて何もわかりませんでした。

ただ、兄はもちろん、多くの先輩方が専修大学に進学していたのは心強かったですね。東都というレベルの高い環境で野球ができることも楽しみでした」

入部して最初に驚いたのが、環境の違いだったという。

「高校時代も全寮制でしたが、野球だけに集中するために厳しい部分も多かったんです。それこそ、寮で出る食事以外で余計なお金を使うこともありませんでした。それが大学生になった途端に寮の自販機で飲み物を買ったり、カップラーメンを食べたりすることもできる。『自由』に少し戸惑う部分もありました」

大学では3学年上の先輩までいることも大きな違いの一つだった。

「特に1年生の時は、4年生の先輩たちがすごく大人に見えました。自分はまだまだ子供、考え方も何も全然足りないな

監督に就任後、すぐに行われた伊勢原でのキャンプでは現有戦力の把握と一人ひとりの選手の名前や力量の確認が行われた。その後、オープン戦を経て、春季リーグへ。第1週の東京農大戦、第2週の帝京平成大戦、第3週の日本大戦、第4週の拓殖大戦を怒涛の8連勝。対象チームだった駒澤大が勝ち点を落としたことから、第5週を待たずに優勝を決めた。惜しくも全勝優勝とはならなかったが、主将の工藤翔斗選手を中心にチームが一つになり、10勝1敗の完全優勝という見事な成績で春季リーグを終えた（写真提供＝右の3点：専大スポーツ）



と。日本中の高校からいろんな特徴を持つ選手がたくさん集まっている環境も、自分にはすごく刺激的でしたね」

最初の1年間は、練習だけでなく、生活リズムを整え、環境に慣れることに必死だったという。「とにかくがむしゃらに過ごした1年間だった」と振り返る。「1年生の時からリーグ戦は出ていたんですが、それはもう、ただ起用されているだけ。無我夢中でした。2年生になると1年間をどう過ごすかもわかるようになり、生活のリズムもでき始めて、少しずつ自分のことを考えられる余裕が増えてきたんです。そうすると、自分には何が必要なのか、どこをどう伸ばすべきかを意識し始めるようになるんです」

中でも町田さんが心がけたのが、「全体練習以外の時間で何をするか」だった。あくまで全体練習は全体練習。それをきちんとやったうえで、自分がイメージする形に近づくために必要な練習やトレーニングを考え、それをやり切ることに時間を割こうと意識した。

「戦国東都といわれるだけあって、チーム内はもちろん、相手チームにもすごい選手がたくさんいます。でも、彼らとの比較に気をとられるのではなく、自分自身の足元をしっかり見つめることが大事だと思っていました。『今、何ができるか』を常に考えていましたし、そのおかげで少し成長できたのかもしれない」

自身で「人生の分岐点」と振り返る2年次には、外野手のレギュラーとして春

のリーグ戦優勝に貢献。首位打者を獲得し、初めてベストナインにも選ばれた。さらに、日米大学野球の日本代表にも選出されるなど、町田公二郎という名は全国の野球ファンに知れ渡る事となる。

「評価していただけるような成績を残すことができたのは、ひとえに上級生の方々がやりやすい環境をつくってくれたからだと思います。チームで同じ目標を持ち、いい雰囲気の中で一丸となれたら結果に結びつくことを実感しましたし、毎年新チームで挑んでいく大学野球においては、その『いい雰囲気』をいかに下の代に伝え、循環させるかが大事なんだなということを学びました」

厳しいプロの世界 強い気持ちで上を目指す

その後もリーグ戦での活躍が評価され、3年次、4年次ともに日本代表に選出された町田さん。1991年のドラフト会議では広島東洋カープから1位指名され、ついに最高峰であるプロの世界へと足を踏み入れることになった。

「正直、1位という評価にはびっくりしました。ただ、駒澤大のエース・若田部（健一）の外れ1位ですからね。評価していただいてありがたかったのと同時に、『入ってからが勝負だ』とも思っていました。プレッシャーですか？その時はありませんでしたが、時間が経つにつれて『1位で入ったんだから結果を出さない』と少しずつ感じるようにはなりました」

学生時代に取り組んだ野球と決定的に違ったのが、職業としてやることだった。自らポジションを獲って稼がないといけない。自分がダメでも代わりはいくらでもいる。そうした緊張感と向き合う中で町田さんを支えたのが、これまでも大切にしてきた「心」の部分だった。

「『心の成長なくして技術の成長なし』心を強く持ち、今までやってきたことを信じてしっかり継続しよう」と

同時に、プロ野球という厳しい世界で生き残っていくために考えたのが、自身の強みである「遠くに飛ばす力」を活かすことだった。

「プロという究極の世界で勝つためには、自分を磨き続けなければならない。私自身、器用な人間ではありませんし、特別守備が上手いわけでもなく、足も速くありません。でもパワーには自信があったので、それをとことん鍛え上げて、弱点を埋めようと考えました。キャリアを重ねる中では、頭を使って考えて野球をやる部分というのも意識するようになっていきましたね」

外野のポジションをともに争ったライバルは、緒方孝市、金本知憲、前田智徳といった錚々たるレジェンドたち。年代が近い彼らと切磋琢磨し、ともに刺激し合った日々は、大変なことも多かったが充実していたと振り返る。

「そういう意味では、すごくいい時代にプレーできたのかもしれないね」

「カープの練習は特に厳しい」と言われていたが、その環境も町田さんには合っていたようだ。

「自分が上手になりたいと思ったら、厳しい、苦しいという言葉はないと思っていました。勝負に勝つためには、相手を上回るだけの練習や準備をして結果を出さないといけませんし、強い心構えで挑まなければなりません。厳しいからこそ、私は成長できたと思っています」

また、カープという球団自体の成り立ちと自身を重ねる部分もあった。

「市民からの募金でスタートした球団であり、常に『ハングリー精神』とともに語られてきたチームです。私自身も、創意工夫を重ねながら地道に実力を積み上げてきたタイプですので、その球団の歩みや価値観には重なる部分が多く、カープという環境だったからこそ成長できた面もあったように思います」

プロで培った経験が 短期決戦の指導に生きる確信

けがとも向き合いながら代打としての役割を担う機会が増え、2004年シーズン終了後に阪神タイガースへ移籍。2006年限りで現役生活に区切りをつけた。なお、現役最終年の7月に放った移籍後第1号本塁打は、歴代2位となる通算20本目の代打本塁打となり、キャリアを象徴する一打として記録に刻まれている。

引退後は指導者の道へ。タイガースで4年間、カープで2年間、打撃コーチを務めた後、新たな道として選んだのが社会人野球の指導者だった。

「大学時代に社会人チームの選抜メンバーとしてオリンピック予選に出たこともあったので、声をかけていただいた時は『挑戦してみたい』と思ったんです」

プロ野球は長いペナントレースの先に優勝を目指す、社会人の場合は都市対抗と日本選手権という2つのトーナメントによる短期決戦がメインであり、同じ優勝を目指すにしてもアプローチが全く違って来る。そして、この「短期決戦」という部分に大きく惹かれるものがあったと町田さんは話す。

穏やかな笑顔を見せながら、自身の野球人生と、チームの未来への思いを穏やかに語る町田さん



「私がプロで向き合ってきた代打という仕事は、いつ、そのチャンスが巡ってくるかわかりません。だからこそ私は『この一球は絶対無二の一球なり』という言葉胸に、その一瞬に全てをかけて向き合い続けてきたのですが、社会人野球の短期決戦はもしかしたらそれに近い境遇、世界観ではないかと思ったのです。私に合っているかもしれないな、と」

そしてそれは、春と秋のリーグ戦に全てを注ぐ学生野球にも通じるものがあると実感している。

「約2カ月にわたるリーグ戦では、一節ごとに確実に2勝を積み重ねることが何より重要です。そのためには、初戦を制することが欠かせません。1試合目の初回から万全の状態で臨めるよう、いかに準備を積み重ねるかが勝敗を左右します。私がプロ野球で培ってきた経験や考え方は、そうした短期決戦での指導にこそ活かせると考えています」

周りが応援したくなるような 誇れるチームづくりを

野球部の監督に就任した際、選手たちにまず伝えたことは「チームのあり方」についてだった。

「たとえば練習の後、グラウンドにボールが落ちたままになっているのはありえないことです。それも1つではなく、いくつも。いつもプレーさせてもらっているグラウンドをきれいに使うとか、道具を大事にするとか、そういう言ってみれば『当たり前のこと』をもっと徹底して

いこうと、そんな話を最初にしました」それはまさしく「心の成長なくして技術の成長なし」にも通じる話だろう。

「技術を高めることはもちろん重要です。しかし、それだけで十分だとは考えていません。私は『プレーする以前の部分を大切に』と思っています。学生はプロと違い、自分たちで考え、行動しながらチームをつくり上げていく立場です。だからこそ、支えてくださる方々への感謝の気持ちを持ち、日々の行動に責任を持って取り組んでほしいのです。勝てるチームである前に、信頼され、応援されるチームでありたいと考えています」

そのうえで、今後はもっと選手のことを見ていきたいと話す。

「学生ですから、やっぱり元気を出していったほうがいいですね。そのためには毎日選手たちの様子を見て変化を感じ取ったり、不安をなくすような取り組みをしていくことが大事だと思っています。そこは、たくさんいるスタッフみんなでやっていこうと話をしています」

目指すのは「応援されるチーム」だ。「野球部というのは見られるチームであり、だからこそ模範であることも大事な部分だと考えます。周りが応援したくなるような誇れるチームをしっかりつくりながら、結果にも責任をもって向き合いたいですね。東都で一番、その先の大学で一番を目指して、これからも泥臭く挑戦し続けていきたいです」

（2026年5月取材）